

第 226 例会傍聴記

榎田寿文氏「「創造は記憶である」黒澤映画におけるドストエフスキーとバルザックの受容」に寄せて

長瀬隆

昨年中本信行による「ドストエフスキーとチャーホフ」の報告があった際、ドストが戯曲を書かなかった理由について問題提起し、私はその長編小説の映画化が無理なことをワイダの唯一の失敗作である『悪霊』を例として述べた。哲学者三浦つとむはその『芸術論』で「最も困難な文学」としているのである。しかし大変に遅れて最近黒澤の『白痴』を DVD で見てこれを黒澤明の創作として理解し堪能した。考えを少なからず改めた次第である。

『罪と罰』が翻訳されてこれが島崎藤村の『破戒』の執筆に繋がったように、ドストの文学は他のロシア作家同様にヒューマンイズムの文学として捉えられ、プロレタリア文学でも葉山嘉樹の諸作にその影響は見られる。白樺派の運動の左派としてスタートした宮本百合子の処女作の『貧しき人々の群れ』は明らかにドストの『貧しき人々』を意識したものだ。黒澤明の戦時下での最初の作品が『虐げられた人々』の涙をさそう哀れな少女ネリーに想を得ているという今回の榎田報告に接して、この傾向はまだ若かった黒澤にも及んでいたことが知られ感慨深かった。

黒澤のバルザック愛好との関連で報告者はマルクス主義芸術論の古典であるエンゲルスのバルザック論を紹介したが、意義深い。この観点はレーニンによって継承され「ロシア革命の鏡としてのトルストイ」の執筆となった。すなわちトルストイはマルクス主義をクリアしたのだが、ドストエフスキーはそういうわけには行かなかった。その優れた試みはペレヴェルゼフにおいてなされていたのだったが、戦前わが国では断片的にしか紹介されなかった。それらを師の小田切秀雄を通じて知り、援用しつつ批判的小林秀雄論（『文学的立場』に発表）を書いた人に西田勝（法大名誉教授）がいる。この西田が小林の戦時下の満州のメディアに書いた文章を発掘発表した（雑誌『すばる』本年二月号）。当時の大東亜共栄圏文学を支持するもので、もちろん現行の全集には収録されておらず、これは翻って同時期の小林ドスト論の解明に大いに役立つことである。

出発点にあったドストの弱者への人間愛の精神は生涯変わらず、『カラマーゾフの兄弟』ではイワンの口を通じて「地球はその表皮から中の芯まで人間の涙でびしょ濡れになっている」と語られることになった。じつはこの貧しく不幸な人々への同情と連帯こそは小林にもっとも欠落していたものであり、反対に黒澤は戦中戦後を通じてこれを懸命に保持してきたことを報告者は立証している。

極め付き付きは今日世界的に読まれているピケティの『21世紀の資本』に触れて「これもバルザックの影響です」とレジメには無かった言葉を述べたことである。表題はともにたんに CAPITAL なのだから「マルクスの『資本論』の」と言っておかしくない指摘だった。

安倍内閣成立直後、病床にありながら電話インタビューに応じて「このままでは死んでも

死にきれない」(この表題で『新潮45』に掲載)と言い残して亡くなった人に辻井喬さんがいる。氏はかねがね私には自身の思考の枠組みについて「結局マルクスによって与えられている」と語っていた。人も知る日共黨員だった人なのである。

ドストの影響がもっと色濃いと言われてきたレオーノフは、望まれるドストエフスキー研究について、「受けた影響はガウス(非ユークリッド幾何学)以上」と記したアインシュタインへの依拠を要望していた。それに応えた業績にクズネツォフの大著『アインシュタイン』があった。またその中の一章を独立発展させたものに『アインシュタインとドストエフスキー』がある。ともに1970~80年代に邦訳があるのだが、わが国(だけではない)の文学関係者はほとんど関心を示さなかった。小林秀雄もそうであった。すでに戦前においてドストエフスキーの小説の革新性を相対性理論の革新性に匹敵するものと賞讃したことがある(『罪と罰』についてI)小林には、惜しまれることではある。説明は省くが、しかしこれも自業自得なのである。

槇田報告は黒澤映画全般についてのものだったが、非常に幅が広く包括的であって、狭くドストエフスキー理解ということに限ってもまことに今日的で傾聴に値するものである。